

デカ記録されているが、その中の何種かが園内に植えられていたのだろう。

モミジは庭園に欠かせない植栽樹で、県内にも大きな庭園には必ず植えられている。四季折々の変化にはっきりと表現し、又、童謡にも歌われているように人の心を癒してくれるような植物である。「春はサクラ」、「秋はモミジ」と日本を代表する植物の一つでもある。

モミジ園は先生の長年の労作だったのかも知れません。奥様と一緒に樹木の変化を観察されるのが楽しみだったのではと。そんなご夫婦の光景が目に見えてきます。そのような時も、先生には至福のひとつきだった事と思われま

す。機会があれば再び、尾崎モミジ園を訪ねて見たいと思っています。

'94年に先生ご夫妻が南米の南端バタゴニア地方にご旅行された折、パイン国立公園で撮られた宿根カルセオラリアの写真を頂きましたが、この種の野生群落は初めてで感激しました。園芸植物の仕事に関係している小生に気配りされての事と思っています。

先生は、いつも我々若年層へのご指導やご配慮の念が大きく、深く感謝申し上げねばならないと思っています。そのお人柄が偲ばれます。

ありがとうございました。 合掌 2005. 7. 20

尾崎先生ありがとうございました

荻野美代

今、尾崎先生を思い出すのは大きなリュックを背負ってニコニコした姿です。あんな力があのスリムな体のどこにあるのか不思議なくらいです。

初めて採集会に行った水無溪谷の帰りは、例のごとく遅くなり、当時入っていた大学の寮は11時の門限でした。で、それには間に合いません。そのとき初対面であった私を先生がお宅へ連れて行ってくれ、お風呂に入れ泊めてくださいました。西大畑のお宅です。あの当時は無知で、泊めていただくのも当たり前くらいに思い、ろくなご挨拶もできませんでした。

次にご恩を受けたのは、教育実習の時でした。あの頃は教育学部で実習校を決めてくれて、私は中央高校で、しかも、指導教官は尾崎先生でした。今も時々同級生にかまわれますが、惨憺たる実習生の私に単位をくださいました。今教員をしていただけるのも先生のお陰です。

最後にお目に懸かったのは、じねんじょの観察会の海谷

溪谷だったかと思います。ステッキの効用をいくつか説明していただきました。① 高い枝を引き寄せる。② カメラの三脚代わりにする。③ もちろん、体を支える。④ 手が届かない人に手助けする。

いつも穏やかな笑顔で、どんな質問にも快く答えてくださったあの笑顔がもう見られないと思うと、本当に残念です。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

尾崎先生の思いで

川端義一

尾崎先生にはじめてお会いしたのは、津南町の植物調査の折りです。当時、牧野先生のご尽力で津南町の植物調査が始まり、じねんじょ会員による調査もたびたび行われていました。その調査の一員としてお会いし、その後何度も調査に同行させていただきました。その調査結果はなかなか印刷されませんでした。先生はそのことをとても気にしておられた様子でした。私のもとへもお見えになり、植生図の写真を撮られたり、いろいろ話をしていきました。その後、印刷に向けて大変お骨折りをいただき、なんとか印刷にこぎつけました。

先生は企画力や組織力に優れた方でこの他にも様々な調査をまとめられました。カエデの先生として有名ですが、湖沼に関する造詣も深く、多くの調査を手がけられました。その中で、佐瀨、鳥屋野瀨の調査の際には調査員に加えていただき、湖沼調査の方法をいろいろ教えていただきました。船上からの調査も経験させていただきました。

先生は何につけ創意、工夫をされ、調査法や道具に尾崎流の改造がなされていました。その後私が、先生が勤務されておられた中央高校へ勤めることになって、このような工夫や改造が様々な面に及んでいることを知りました。部屋や道具、器具のいろいろなところに尾崎先生が手を入れた跡が残っていたのです。このようなことをするのは尾崎先生しかいないと一目でわかるような仕事がされていました。決してプロの仕事ではないけれども使う立場で考えられた手の入れ方が、何とも尾崎先生らしいと感心させられるようなものばかりでした。

何度も調査や採集にご一緒させていただきましたが、いつも変わらぬ先生の気遣いがあの笑顔と共に思い出されます。

お亡くなりになった年も年賀状をいただき、前年の10月にドイツ、オーストリアに行かれた旨が記されており、お元気そうで安心していました。ところが、入院されていることと病状を総会で聞かされ、翌日病院へお見舞いに伺いました。声も出ない状態でしたが、非常に喜んで下さり、また採集に行きましょうと話すと、手をにぎって答えて下

さいました。それがお別れになってしまいました。

尾崎先生ありがとうございました

小林 巳癸彦

平成15年5月14日、尾崎先生から学校に「糸魚川のツツジ園、月不見池のフジを觀賞後、笹倉温泉に入浴し今糸魚川駅にいる」「糸魚川に来たので声を聞きたくて」との電話があり、すぐ駅に車を走らせる。短い時間ではあったが、駅前の喫茶店で奥さんと3人で、コーヒーを飲みながら、黒姫山の思い出、佐渡や植物の話をし、糸魚川駅発18時39分の「北越」で送ったのが尾崎先生との最期の別れの日となった。

私が、尾崎先生と始めてお会いしたのは、大学3年の夏、すなわち、1967年8月4日～9日のじねんじょ会の長走川から蒜場山植物調査の時であった。参加者全員が長走川を渡渉した直後に大雨となり、川水はあつという間に増水した。尾崎先生が「川水が引くまでには時間がかかり当分は帰れない」と穏やかな笑みを浮かべて話されたのが印象に残っていた。それからはアブの大群に悩まされた。二日目まだ増水し水かさ下からない長走川から、高村晴元氏中心に、この調査のため、数回道つけをした新登山道での調査が開始された。WV育ちの私にとって植物調査の山行は、リズムがなく、天候は悪く、新しい登山道の歩行となりかなり体力を消耗しながら泊まり場「日の出清水（新称）」に到着した。清水に生息していたサンショウウオの幼体を飲むと目が良くなり元気がでるといふ池上先生の言葉で、度の強いメガネをかけていた笹岡先生が一気に飲み、笑いを誘い全員が疲れを癒す。忘れられない思い出になっている。

大学卒業後教職の道を歩いた私は、じねんじょ会はもちろん、生物分野の教科指導、や生物教育研究会でも尾崎先生から数々の御指導をいただいた。

「カエデの尾崎」「杵差岳の尾崎」「水性植物の尾崎」「瀧の尾崎」「巨樹・巨木の尾崎」「ハーモニカの尾崎」「アイデアの尾崎」など、常に新しい視点と発想で、いつも笑顔でお話をし、時にはテント場で、ハーモニカの音色で疲れを癒していただいた。先生の怒った顔は1度もみていない。

1975年夏じねんじょ会夏合宿は、尾崎先生の持ち山である杵差での東俣のカモス沢コースから杵差岳山頂までの調査であった。途中水がないコースのため、1人4リットルの水持ち上げが義務づけられ、重い荷がさらに重く感じての雨の中でのスタートとなる。雨は益々激しくなり、ブナの幹を流れ落ちる雨水でのを潤しながらの調査（登山）は、植物などは何のその、ひたすらトボトボと登る。途中の尾根でのテント場に着いた時は、ぬれたザックが重く体力消

耗し、「こんな重いカボチャなどもてるか」とカボチャを谷に投げ捨て、雨の降り続く中で笹の芽のみそ汁。「早く行きたや雲母温泉」が合い言葉の調査となったが、尾崎隊長の笑顔と調査に対する情熱で全員無事3日目に山頂小屋にたどり着く。思い出の飯豊山の一駒は鮮明に我が脳裏に焼き付いている。

また、福島瀧、佐瀧、鳥屋野瀧の調査のお手伝いをした。デンジソウ、オニバス、アサザ等貴重な植物との出会いも遠い昔の話になっている。

新潟県生物教育研究会の事務局は、新潟中央高校にあったが、尾崎先生が定年退職された昭和59年には新潟高校に移されており、微力ながらお手伝いすることになった。時代の流れの中で、創設時のメンバーも変り、生教研の活動内容も大きく変化していた。尾崎先生は、新潟支部の活動には良く参加していただき、難しい舵取りもいつも笑顔でまとめていただいた。

それから、何年たっただろうか？今、私が退職の年を迎えている。退職されても好奇心旺盛に活動された尾崎先生の姿をお手本に、私も第2の人生を歩き出そうとしています。

尾崎先生本当に長い間の御指導ありがとうございました、心安らかに眠りください。

その時、7歳と70歳

櫻井 幸枝

2000年4月29日、笹神村での第246回の調査会のなかでの出来事。もう調査会全体の記憶もあいまいになりつつあるが、「尾崎先生に関する事で何か文章を」という話が出たとき、思い出したのがこのときの出来事である。

この調査会に子供づれで参加した私は、写真など撮影しながら皆さんと歩いていた。ようやく訪れた春は日差しも明るく、写真の記録によるとホオノキの芽吹き、オオバクロモジ、ユキグニカンアオイ、ユキツバキ、サルトリイバラ、ユキグニミツバツツジの開花などを観察し、散策していたようである。もうすぐ権現山の山頂、というところで尾崎先生が道沿いのウラジロイタヤ（？アカイタヤだったか？）を手にとり、何事かお話して下さった。穏やかな口調を思い出すものの、どんなお話であったかは忘れてしまった、残念。

山頂には神社か祠があったか、ちょっとした広場のようで、どなたかが珍しいキノコを採集したとかで見せていただいた（キヌガサタケだったのだろうか？）。山頂で少し休憩し、その下り道のこと。花や実立ち止まったり、追いつき追い越して何人かの人と一緒にまた離れたりして歩いていた。ユキツバキの茂る道を歩きながら、西山先生